

花も実も売るサクランボ



寒河江の榎部さん

榎部さん一年目を迎える陽光浴びる。ハチ植え。

高農資料を参考し、南陽市内の原
かじに原着る。
榎部さんは八八年生は、根元の太さ
二十センチ、高さ五尺にも成長し
た。同じ年にはち植えしたものは、
それと互いに、八十センチ
弱、実の数は違ふが、色つやや
酸の大きさはほとんど変わらない。
榎部さんは「かえってち植え
の方がよい。いまではほぼほ
い進りに栽培できるようになった。
た。二千四百五十四と六、七百
個が売れるという。
榎部さん、何故のに、八軒の農家も
尾なるようになったといひ、実
を売らただけだったサクランボ生
産者の新しい生き方として広がら
つある。高農資料を参考し、二年目を
迎へ、調査がなされたばかり新しい
栽培法が注目されそうだ。榎部さん
は輸入問題に対しても「反対はか
りしていても仕方がない。これか
らは長靴のものが売られ、然
し輸入品が出てくるのではないか。
価格もよいものを作るしかな
い」と前向きだ。

工夫重ねて試作の末 ハチ植え栽培にメド

寒河江市三軒、榎部一さん(三
もはち植え栽培に自信を懐いてい
る。コソコソと安産産産を自慢し
た。榎部さんのサクランボの種
入産産産目という試作の中でス
ポットを育てられた。

榎部さんは、四十四年に寒河江
で、しかも翌年で、実を切はせる
にも手がついたら、四十七年から

生かさないものか」と、(わ
い)化産産産を思い立った。わらい
は「はち植えすれば、榎部さん
らないように育てることもでき
る。先の実用としておられるはず」
榎部の目標は「いかに小さく
育て、しかも翌年で、実を切はせる
にも手がついたら、四十七年から